巻頭言

化　学　物　質

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
鯉洲学園講師　村井敏信

最近，「化学物質」という言葉を目にする機会が多くなってきた。手元の辞典（講談社：日本語大辞典第二版）を調べてみる。「化学物質：①化学の研究対象となる物質。また，②化学反応を利用して人口的につくられた物質」とある。しかしながら，現在，マスコミ関係で用いられている化学物質の意味は②の定義のみに限定して使われているようにみえる。化学物質と言う言葉を②の意味に限定すると，天然物質は化学物質ではないということになり，これは基本的な矛盾であり，誤りである。②の意味を導入するのなら「人工化学物質」と「天然化学物質」とに使い分けるべきであった。

さらに問題なのは，マスコミの一部に，人工化学物質はすべて危険あるいは悪ときめつけようとする風潮がみられることである。確かに，「ダイオキシン」のように極めて危険性の高い化学物質も存在する。しかし，多くの人工化学物質は人間社会にとって有益であり，現在の文明は人工化学物質によって支えられているといっても過言ではない。現代の人間は，原始生活の中では生きられないのである。化学物質に対して，化学的データに基づく正しい認識が必要とされる。

農薬も化学物質である。マスコミや一般の人の農薬の評価は極めて悪い。しかし，その論拠をつきつめてみると，化学的根拠がなく，間違った先入観や誤解に基づくものが大部分である。マスコミの関係者を含め多くの人は，農薬が登録され市販されるまでに，その安全性を確保するため，急性毒性試験や慢性毒性試験など多くの試験により候補物質の選抜が行われていることを知らない。そのため，なにか有毒物質による事件が起こるといわれなく農薬が疑われる。

数年前に「松本サリン事件」が起きた。７人の死者と多数の負傷者が出た真に忌まわしい事件であった。そして，被害者であったが，第一通報者の河野義行さんに犯行の容疑がかけられた。しかも，その容疑について，マスコミは，「農薬の調合ミス」といった見出しで，河野さんの犯行ときめつけ，多数の薬品が押収されたと報じた。しかし，実際に河野さんの所持していた薬品の中で，農薬は，毒物でも劇薬でもないスミチオン粉剤だけであったようである。その後，数日して原因物質は化学兵器の「サリン」であることが明らかにされた。しかし，サリンにつながるような薬品は所持していなかったにもかかわらず，河野さんにかけられた容疑は依然として続くのである。どうして農薬の調合ミスとサリンが結び付くのであろうか。マスコミにおける化学的論理性の欠如した報道姿勢が問題の解決を遅らせたように思える。

翌年になって，「地下鉄サリン事件」が発生し，松本サリン事件も「オウム」の犯行であることが明らかにされた。ここに至って初めて河野さんの無実が認められ，マスコミは一斉に河野さんに謝罪することになる。サリンによる被害に，「報道被害」が加わり，この間，河野さんとその家族が受けた苦痛には想像を絶するものがあったことであろう。

河野さんは，不十分ではあるが，名誉だけは回復された。しかし，「農薬の調合ミス」などと農薬にかけられた容疑については謝罪されることがない。せめて，農薬を化学的に正しく理解してほしいものである。